Love＊escape

彩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｖｅ＊ｅｓｃａｐｅ

【Ｎコード】
Ｎ１１４２Ｖ

【作者名】
彩音

【あらすじ】
「誰が側妃になどになるものかっ！！」

――――――私は玉城依璃亜、十五歳。高校の入学式の帰り道の途中、突然光に包まれて異世界に喚ばれた。
そこで待っていたのは金髪蒼眼の美形。
しかも「これが正妃として喚ばれた娘か？こんな子供を、娶れと言うのか？ハッ……冗談だろ？」だと……！？
こっちこそ冗談じゃないよ！誰があんたみたいな俺様野郎の嫁なん

かになるものか……！！

そんな感じであいつの元から逃げて三年。優しい地方の領主様に拾われ、姿を変え、普段は男として、たまに女として一人二役双子を演じながら過ごしていた。

しかし、その平穏もある一枚の紙により、大きく変わることになる。

「あの俺様皇帝が、私（銀髪紫眼の女の姿）を側妃に上げるですってぇぇぇ！？」

誰がまたあんな奴の嫁になどなるかっ！！

――これは、家出中の正妃が姿を隠しつつ、皇帝から逃れるために奮闘するラブコメ物語です――

※後先考えずに投稿した作品です。なので、更新はかなり不定期になると思います。ご了承下さいｍ（＿＿）ｍ

プロローグ

季節は、春。暖かい日差しの下、若々しい新芽が顔を出し、その周りでは、色とりどりに彩られた花達が芳しい香りを放っている。

そんな、何処か穏やかな気分にさせる朗らか春のある日、そんな外の雰囲気とは裏腹に、ここシュウ゛ァルツ帝国宮殿の廊下を、青筋を立てたとある青年が鬱憤を放ちそうな勢いで進んでいた。

数分後、大きな扉の前で立ち止まった青年は、一度息を吐きノックもせずに勢いよく開けた。

「陛下っ……！！これは、一体どういうことでしょうか！？」

「おぉ、遅かったな？イリシス。

というか、ノックはちゃんとしろよな。お前、俺の立場分かってる？」

肘をつき、ニヤニヤとした笑みを向ける金髪蒼眼の青年に、青年は眉を寄せながら右手に掴んでいた書類を目の前の青年に突き付けた。

「…これは、一体どういうことでしょうか？陛下。

私には幻覚が見えるのですが？」

「それは幻覚ではないぞ、事実だ」

青年の晴々とした笑みに、プツンッという何かが切れた音が響いた。

「へ・い・か？」

ダンッ…！！

「どうして、“私の妹”が“陛下の側妃”に上がることになっているのですか…！？」

もはや苛立ちを隠さずに声を荒げる青年に、金髪蒼眼の青年はニヤリと笑みを浮かべた。

「理由は至極単純だ」

目を細め、怒りに燃える青年に目を向けた。
そして、スッと右手の人差し指を上に伸ばす。

「一つ、地方とはいえ、素晴らしいとの評判で名高いルーウ〝エンツェル家領主の娘であり、優秀なお前の妹であること」

「っそれは……！」

「二つ」

反論する青年の言葉を遮り、さらに中指を上に伸ばして口を開いた。

「何より……、この俺が気に入ったからだ」

ニヤリと、今までで一番苛立つ笑みで宣言され、青年の額に太い青筋がピキリと立てられた。

「…前は、あんなに……！」

「何か言ったか？」

「……いいえ、何もございません。
陛下の言い分はよく分かりました。……しかし、陛下には正妃様がいらっしゃるではありませんか。そんなことをお考えになられる前に、正妃様をお探しになされるほうが先なのでは？」

皮肉気味に、最大限の嫌みを吐き出した青年に、陛下と呼ばれた青年は眉を寄せ目を落とした。

「それは…分かっておる。だが…いや、これもいい機会かも知れん。
そもそも、正妃を異世界から喚ぶなどというくだらん掟があるから、あの小娘が逃げ出すなどという事態に陥ったのだ。
次代に強い子孫を残すためというのは分かるが……。

まあ、いずれにせよあの小娘は必ず見つけ出す。強い子供を作るための大事な身体だからな。…まぁ、何も知らない子供がこの世界で生き残れているかも怪しいが……。
――とまぁ、あの小娘のことは今はどうでもよい。
お前の妹――イリシアのことは、お前が心配せずとも大事にする。だから、何も問題はないだろう？」

全く悪気も見せずに青年は笑みを浮かべてそう零した。
そこまでおとなしく聞いていた青年――イリシスは、人を射殺せそうな冷たい目を青年に向けた。

「…最低、ですね。そんなことを平気でおっしゃられるようでしたら、ますます妹を嫁がせる訳にはいかなくなりました。
ということで、諦めて下さい」

そう言い、ニコリと笑うイリシスに、青年は「ハッ…」と鼻で笑った。

「お前は馬鹿か？そもそも、そちらに拒否権など存在しない。これはお願いではなく、命令だ」

「そんな態度だと嫌われますよ？」

「それこそありえんな。何処に皇帝の妻という地位を捨てるやつがいるんだ？」

「正妃様がいらっしゃいます」

「…あれは唯一の例外だ。まぁあいつももう少し物事を考えれるようになれば、戻ってくるだろうがな」

「…では、賭けますか？」

「…何？」

ふと落とされた言葉に青年は訝しげにイリシスを見遣った。
窺うような視線を確認し、イリシスは意味ありげな笑みを浮かべた。

「そこまでおっしゃられるのならば、一つ、私と賭けを致しませんか？
――もし、陛下の言う通りにイリシアが陛下を気に入れば、陛下の命令に従い、イリシアを側妃として上がらせましょう。しかし、私の言う通りにイリシアが陛下のことを嫌悪し、嫁ぎたくないと申しましたら、このお話は白紙に戻して頂きます。
期限は……、そうですね、陛下が納得するまででかまいません。
――そのかわり、陛下が無理だと確信した際にはきっぱりと諦めて下さいね？」

ニコリという音が聞こえそうなくらい清々しい笑顔で問われた青年は、眉を寄せ何とも言えないような表情でイリシスに目を向ける。

「…随分と自信があるようだな？」

「ええ。自信というよりは、確信ですが」

「……いいだろう。お前がそこまで言うのなら、賭けに乗ろうじゃないか。

……というか、“イリシスはシスコン”という噂は本当だったんだな？何でも、屋敷からほとんど出さず、その姿を見たことがある者も数えるほどしかいないそうじゃないか。

――いつまでもそんな事をしていると、お前のほうがイリシアに嫌われるんじゃないのか？」

ニヤニヤとした目を向けられ、イリシスは青筋を立たせて青年に鋭い目を向けた。

「断じて、私はシスコンではありません。それに、私がイリシアに嫌われることは決してありません。これは自惚れではなく事実です。

――では、私の用は以上ですので、失礼致します」

書類を持ち直し、イリシスは扉の方へと足を動かす。

「あぁ、そういえば」

…が、扉に手を掛けかけた時に青年の声がかかり、動きを止める。

そして一拍経てから再び青年の方を見遣った。

「…何ですか？」

「いやなぁ…、お前ちゃんと飯食ってるか？
料理長からお前がいつも人より少なめにしか食べないと聞いていてな。腕も細いし……、お前は宰相補佐だが、俺の護衛でもあるんだ。もっと力をつけてもらわないとな。
その体つきだと、イリシアに間違えられるぞ？」

「――余計なお世話です。では、失礼致します」

バタンッと勢いよく閉められた扉の音に、青年は苦笑を漏らした。

＊　＊　＊

ムカつく、ムカつく、ムカつく――――！！！
何なの、あいつ！？何様のつもり！？……あ、皇帝様か。
――ってそんなこと関係あるかあぁぁ！！

「ああ、もうムカつくっ！！」

「お帰りなさいませ、イリシス様」

「ああただいま、アリア。…あと、何度も言ってるけど、屋敷では“依璃亜”って呼んでよね？」

「はい、そうでしたね、イリア様。
ところで、どうでしたか？例の件は」

何気なく問いた言葉に、イリシスはピシリと動きを止め再び怒りを燃え上がらせた。

「そうなのよっ！聞いてよ、アリア！！
あいつさぁ、何て言ったと思う！？
『俺が気に入ったからだ』だって！！何、ふざけてんの！？ねぇ！？
喚ばれて会った時は『こんな子供』って馬鹿にしてたくせに～～！！」

皇帝の態度を思い出してさらにイライラが募り、地団駄を踏むイリシスにアリアは苦笑しながら呟く。

「正妃様もイリシア様もイリシス様も――どれも“イリア様”ですのにねぇ……」

「……あぁ、本当イライラする！！」

自室に戻ってからも散々悪態をついた後、イリシスは一息ついてそっと目を閉じた。
そして次に目を開けた時には、銀髪から黒髪へ、紫眼から黒眼へと――“イリシス”の姿から“依璃亜”の姿へと変貌を遂げた。

「…ふぅ。やっぱり元の姿の方が落ち着くなぁ。
やっぱり純日本人顔の私には黒がしっくりくるよ」

鏡で自分の顔を眺める。
こちらの世界に喚ばれてから、約三年が経つ。肩に付かない程度のボブだった髪の毛も、腰の下くらいまで伸びた。
あと少しで十八歳になるし、顔つきも何処か大人びたように感じる。

…でも、顔はほとんど変わってないよな…。

「…あいつ、何で気づかないんだろう…？」

いくら色を変え、男として違和感を感じないような魔法をかけているとはいえ、元の顔は変わらないのだから、よく見れば何かしら気づくはずだ。
イリシアの姿をしている時は尚更だ。

「…それって結局、どの姿の時も私のことちゃんと見てないってことだよね…？」

……何か考え出したら腹が立ってきた。

――てか。

「私は『イリシアに間違えられる』んじゃなくて、その“イリシア本人”だっつーのっ！！」

ハーハーっと息を乱しながら、依璃亜は叫ぶ。そしてしばらく経つと、次は口角を上げてニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

「フフフ……。あいつってイリシアの姿の私を気に入ってるんだよね…？」

黒髪の間から、細めた目を光らせる。

あいつはイリシアを気に入っている…。――だけど、イリシアは私。
私は、あいつ――皇帝のことを嫌っている。しかも心底から。
だから、私が――イリシアが皇帝を好きになることはない。
そう、だから皇帝があの賭けに勝つことは、絶対にありえない。

「馬鹿ね……。よりにもよって、自分が嫌悪した人間を気に入るなんて」

クシャッと右手に掴んでいた書類を握りしめる。

「この私に目をつけたことを……――死ぬまで後悔させてやる…！！」

今日も依璃亜の部屋からは、皇帝への罵詈雑言の叫びと笑い声が響いていた。

ようこそ正妃様　†召喚†

事の始まりは、高校の入学式の帰り道。

「うわぁ～～、桜綺麗～…。
入学式の日に咲いてるなんて、超ラッキー♪」

真新しい紺のブレザーに身を包み、私――玉城依璃亜は呟いた。

今日は高校の入学式。この高校は偏差値が高い進学校だがそのわりには自由な校風であり、何より制服が可愛いことで地元でも有名な学校だった。
だから、勿論倍率も高い訳で……。この学校に入るために、どれだけ努力してきたことかっ……！！
……あ、何か泣けてきた。

――とまぁそんな訳で、私はこの日をずっと楽しみに待っていた。
ニヤける顔を止められずに上機嫌で足を運ぶ。

《…みつ…た……ま…》

ん……？今、何か聞こえた……？

ふと立ち止まり辺りを見渡す。春風により散る桜。その横で流れる

小川のせせらぎ。そして、人気のない小道。――ふむ、特に変化はないな。空耳…？……受験勉強での疲れがまだ残ってるのかな……？

《……みつ…た……せ…さま……》

……空耳じゃないぃぃっ！！

恐る恐る後ろを振り向くが、やはり誰もいない。……幽霊？

「ひぃぃぃぃ――！！」

ヤバイヤバイヤバイよおぉ！！

何！？マジで幽霊！？人外？人外の生き物（？）がついてるっていうのっっ！！？

「私が何をしたっていーうーのー！？」

逃げてます。ええ、それはもう全速力で。多分、今自分の中では新記録が叩き出されてるよ……！

《――見つけた、我等の正妃様――》

「ひっ……！？」

突然、大量の光に包まれる。その白い光に咄嗟に目を閉じると、次の瞬間、浮遊感を感じたと同時に意識は暗転した。

＊　＊　＊

ドスッ……！

「いっ……！！」

…痛い。何コレ？浮遊感を感じたと思ったら、次は落下デスカ？マジありえない。

思ったよりお尻が痛くないから、そんなに高い所から落ちた訳じゃないだろうけど。

「…オイ」

あーでもやっぱ痛いかも。何故……？――ハッ！！もしかして、…太った？その分だけ重量に負荷がかかったのかっ…！？

「…オイ、小娘」

あれか……！？おやつに食べたプリンかっ！？
あれのせいなのか……！！

「…いい加減にしろよ、小娘」

「痛っ……！？」

突然、頭に激痛を感じる。反射的に頭を上げると、そこには冷たい視線をこちらに向ける、金髪蒼眼の美形の姿が。

「……誰デスカ？」

というか手を離せ。地味に痛いんですけどっ！！

そんな私の心の叫びを知らずか、その男は私の顔をじっと見つめ、

不愉快そうに眉を寄せた。そして、パッと私の頭から手を離すと、呆然とそちらを見遣る私を睨みつけてから後ろを向いた。

「……オイ、魔術師長。これは一体どういうことだ？体格から幼いとは思っていたが…、これでは子供ではないか？こんな子供が正妃などと……。冗談じゃないぞ…！？」

怒りをあらわにしながら、男は傍らにいる男性に詰め寄る。怒りの矛先を向けられた、身体を覆う白いローブを羽織った年配の男性は、顔を青ざめさせながら戸惑いの表情を浮かべていた。そして、「恐れながら」と零す。

「召喚の条件は“多くの魔力を有していること”“子供を産める、若く美しい娘であること”“皇帝様と相性の良い娘であること”というものでした。ですので、適齢期でない子供が喚ばれるということは無いはずなのですが…」

「しかし、あれはどう見ても十二、三程ではないか！？」

「それはっ……」

二人の間で白熱とした言い合いが展開されている。それを眺めながら、私はとりあえず今の状況を整理してみた。

あの人達の話を聞く限りでは、私はあの人達に召喚されたらしい。そして、あの偉そうな金髪蒼眼の男が皇帝様。つまり一番偉い人っ

てことかな？で、その皇帝様に詰め寄られているのが、魔術師長。
…私を喚んだ人？多分。
そして、私は皇帝様の正妃様になるべく異世界に召喚された、と。

――――“異世界ネタ”キター……！！

皇帝の正妃様になるために召喚なんて、小説の中だけの話だと思ってたよ…！！まさか自分の身に起こるなんて……！！
しかも、日本人が若く見られるって本当なんだねっ！！十二、三歳はちょっと傷つくけど……、私、今年で十六だよ！？

ってか、そこの二人！！私を無視して話を進めるんじゃなあぁぁぁぁあいっ！！！

「やり直せっ！！」

「し…しかし…、正妃様のご召喚は生涯ただ一度だけと、掟で決まっていらっしゃいます！」

「…そんなことは分かっておる！！」

おぉぅ……。一度だけなのか…。それって喚んだ人と相性最悪だったら終わりだよね。そうなったら喚ばれた人かわいそう。だって帰れないんだもんね。
……ん？っていうことは、私も戻れないのか？

「…チッ…！！仕方ない。――オイ、娘。名は何という？」

…え！？ここで私に振るの？今まで散々無視しといて！？

「……人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るのが礼儀だと思うのですが」

てか、こっちは来たくもない喚び出しに不本意ながら応じてしまった訳だけど、一応客人だよね！？罵声は疎か命令される筋合いはないんですけど！？

だけど、それは皇帝様の癇に障った訳で。

「何だと…！？貴様、誰に向かってそんな口をきいていると思っているんだ！！

……チッ、もうよい！誰か、この娘を部屋に連れていけ！！」

「失礼致します」という声と共に、ものすごい力で二人の侍女に引っ張られていく私。

……一体、私が何したって言うのよっ…！！

ようこそ正妃様　†双子の侍女†

暖かい朝の日差しが照らされる中、小鳥のさえずりが響く。
そんな穏やかな景色にポツリと私の声が落ちた。

「……ありえない」

…何がありえないかって？
まずこの状況。

そっと周囲を見渡す。
落ち着いた純白の壁紙の部屋……しかも、体育館並の広さ。その内に、細かい模様が端々に刻まれた机や椅子、ソファー、ベッド、ドレッサー……等など。様々で、かつ共通の趣を示している。それらが、綺麗に部屋の中に納まっている。
そして、大人が五人くらい寝れるのでは？と疑問を抱かせるほど大きくて広い、レースの天蓋付きの、これまた純白で覆われたベッドの上で佇む私…。

…うん、どう見ても私の部屋じゃないしね。
で、何より……この意味不明な状況でいつも通りにぐっすり眠れた自分自身が一番ありえないっ……！！

だってさ、このベッド見てよ！？この掴めないような柔らかさで高級感溢れるベッドだよ！？眠くなっちゃうじゃん！？
……はい、すみません。ちょっと調子に乗ってました。
いや、初めはリラックスするつもりなんて微塵もなかったんだよ？

だってさぁ、意味わかんないじゃん？
侍女らしき二人に引きずられること十数分、ようやく部屋に着いたのか？と思ったら、いきなり「明日の朝お迎えに伺いますので、それまでゆるりとお過ごし下さいませ」って、返事する間もなく部屋に押し込められたんだよ！？しかもご丁寧に鍵も閉められて！
で、諦めて振り向いたら、そこは白とピンクで纏められた、可愛いながらも上品なもろ“お姫様”って感じの部屋で。
…いやぁさあ、こんな私もまだ十五だからね、あのですね、人並みの憧れはある訳ですよ。だから、女の子の夢を詰め込めたような部屋にテンションが上がったのは仕方のないことで…。

いや、ほんとすみません。だからといって全てを忘れてはしゃいだのは軽率でした。

ハァ……、とため息をつきながら目を落とす。
…何してんだろ、私。傍から見たら、ぶつぶつ独り言呟いてるただの変人だよね…。
そんな感じで何となくうなだれていた私の耳に、扉をノックする音が響いた。

「お早うございます、正妃様。起きていらっしゃるでしょうか？」

「あ、はい」

「失礼致します」

聞き覚えのある声と共に現れた姿に、「あっ」と一声上げる。

昨日の侍女さんズ……！！

そこにいたのは、昨日私を誘拐監禁（？）した二人の侍女さん。
二人とも私より少し背が高くて、茶髪茶眼のやや童顔で可愛いらしい容姿をしている。昨日は混乱していて気付かなかったけど、こうして見ると、全く同じ顔が二つ。ついでに迫力も二倍。……ぱっと見私よりも華奢なんだけど、内には凄い力を秘めてるんだよね…。
……この見た目に騙されちゃダメよ！！依璃亜！！

「昨晩はゆっくりとご休憩致せましたでしょうか？」

「ええ、それはもう。自分でも信じられないくらい」

「左様でございましたか。ならば宜しかったです。
では、今日のご予定をお知らせ致します」

何…！？完全スルーだと！？この双子……出来るっ…！！

「今日のご予定ですが、まず、ご朝食を陛下と共にとっていただきます。その際に、今後のご予定や詳しい事情説明があるとお聞きしています。
ですので、まずは身なりを整えさせていただきます。
それと、申し遅れましたが、私は正妃様の専属侍女を承りました、姉のティナ、こちらが妹のティアです。至らない点も多くございますが、どうぞ宜しくお願い致します」

「すみませんごめんなさい。お願いですからその敬語止めて下さい」

言葉の威力ってほんと凄いね。産まれてこのかた、一般庶民で通してきたただの一日本人には、この敬語のオンパレードは最早言葉の暴力の域に達するよ…！！

「そのように申されましても…、私達と正妃様とでは身分が違いますゆえ」

「…せめて“正妃様”は止めて下さい。そもそも、私は承諾した覚えは微塵もないんですが」

「承りました、正妃様。それでは、お名前を伺っても宜しいでしょうか？」

またもや見事にスルー！！……もういいや、何か疲れたし。

「…私は、玉城依璃亜と言います。依璃亜が名前の方です。とりあえず、宜しく」

「こちらこそ宜しくお願い致します、イリア様、…で宜しいでしょうか？
では、まずはこちらの御召し物にお着替え致しましょう」

「あ、はい。着替えはどれですか？」

…何か嫌な予感がするのは私だけでしょうか？

「ティア」

「はい」

ニコリと今まで一歩後ろで佇んでいたティアが、一歩前に出て腕をそっと差し出す。

「こちらが今日の御召し物でございます。では、失礼致します」

「ちょっ…！？何するんですか！？」

躊躇なくティナとティアの手が制服に触れ、勢いよく剥がしにかかる。

やっぱり嫌な予感がしたと思ったよ！全く躊躇しないなんて……なんて恐ろしい双子っ！！

「何、と申されましても…、お着替えのお手伝いをさせていただくつもりでしたのですが……」

「着替えくらい一人で出来ます！」

「…これでもですか？」

ピラリと広げられたそれは、薄いピンクの上品なドレスで……――
って“ドレス”！？

「これでも、本当にお一人で出来るのでしょうか？」

ニコリと、音が出そうな笑顔が二つ。
ヒクリと顔が引き攣る。

この双子……、絶対分かっててわざと言ってるな…！？

「……宜しくお願いします」

うなだれた先の二つの笑顔に、やはり侮れない双子だと再確認したのだった。

ようこそ正妃様　†準備†

「まぁ、よくお似合いですわ、イリア様！！」

「とても麗しいお姿ですわ！！」

「……それは、よかったですね」

目を輝かしてこちらを見遣る双子とは対照的にグッタリとうなだれる私…。

ナニコレ？新たなイジメですか…？

目の前で佇むもう一人の私に、ハァ…と息をつく。

結論から言うと、ぶっちゃけ似合わない。てかむしろ、そこで騒いでる双子の方がよっぽど似合うと思うんだけど。

チラリともう一度鏡の中を覗く。

淡いピンク色のドレスに身を包んだ私が、同じようにこちらに目を向ける。少し大人っぽく見えるのは、双子に施された化粧のおかげかな？でも短いボブが何だかちぐはぐな感じ。やっぱりドレスって言ったらロングヘアーだよね。うん、絶対。てかそれ以外認めない。

でもこのボブだってかなり気に入ってんだよ？『プチ高校デビュー♪』とか何とか言って、入学式前日にバッサリ切っちゃったんだよな。昨日までは軽くなった頭にテンション上がってたのに…。今は

寧ろ切る前に戻れって感じ。……何か複雑。

とまぁ、こんな感じで自分に向かって遠い目をしていた私に、「そろそろ時間でございます」という、双子の声がかけられる。にこやかな表情を浮かべる双子に憂鬱そうな表情で返す。

「……今から行くのって朝食だよね？ドレス着る要素かけらもないよね？」

「そんなことはございません。王宮の中とはいえ、いつも人の目がある所ではきちんと身だしなみを整えることは、貴婦人のマナーですわ」

「いやいやいや！！私、ただの一般庶民だよ！？
てか朝食って一人じゃないの！？だったら余計に無理！他の服を用意してよ！」

こんな情けない姿他人に見せてたまるものか……！！

しかし、そんな望みは一瞬で崩れ去ることになる。

「御召し物はそのドレスしかご用意されておりません。それが嫌とおっしゃるならば……裸になって戴くしかありませんね？あ、もちろん先程着ていらっしゃった御召し物はございませんよ？もう係りの者にお渡し致しましたから。――ドレスと裸、どちらを希望なさりますか？」

「すみません！私が間違っておりました！！
このドレス、とても素敵だと思います！！」

この双子の恐ろしさを忘れてた数秒前の自分を殴りたいよ！

「えぇ、それならよろしいんですよ？
ではご案内致します」

笑顔の隙に垣間見た黒い何かに、戦慄が走る。
「はは、は…」と乾いた笑みを浮かべながら、私はその背中を追った。

どうか何事もなく無事に終わりますように、と心底願いながら。

＊　＊　＊

「こちらがお食事をなさるお部屋でございます」

「ここですか…」

歩くこと十数分、ようやく着いた場所にはドンッと構えた大きな扉が一つ。

…うん、何だか嫌な予感しかしないだけど。

なんて若干現実逃避しそうになった私の意識を繋ぎ止めたのは、「失礼致します。正妃様をお連れ致しました」という高い声とノックの音で。

「入れ」

ああ、やっぱりね！！

いや分かってたんだけどね。何となく認めたくなかったんですよ。

扉の先では、全ての諸悪の根源である皇帝様が鋭い眼差しをこちらに向けていた。

ようこそ正妃様　†朝食と今後の予定†

カチャッ……コツ……。

…お、重いです…。何がって？……この空気がですよ！

鋭い視線とできるだけ目を合わせないように、促されるまま食事の席についたのが数分前。最初は運ばれてくる色とりどりの食事に目を輝かせていたんだけど、如何せん、持ち前のスルースキルがもたなかったみたいで。入室以来絶え間無く向けられる無数の視線――特に、長い机越しに向かい合っている皇帝様からのものに、もう手がブルブルですよ。

え？これ何てプレイ？

生まれてこの方十五年、ここまでの羞恥プレイは初めてですよ。

フフフフ……と心の中で涙を流していると、鋭い視線の主がスッと目を細めた。

「……娘」

「はひぃ…！」

変な声が出た…！？

やばい、今すぐ逃げ出したい気分です。

「……すでに聞いておるかもしれないが、お前はこの俺の正妃になるべくこの地に喚ばれた。
お前のような子供に任せるには大役過ぎるかも知れないが、如何せん、召喚は生涯ただ一度のみと掟で決まっていてな。非常に不本意だが仕方あるまい。お前も俺に従い、きちんと正妃の役目を果たすことだ。
俺の手を煩わせるなよ」

……。
何だろう？この胸の奥底から湧き出てくる激しい苛立ちは。
やっちゃってもいいかな？私にはこの怒りをぶつける権利、十分にあると思いませんか？
……いやいや落ち着け自分！この状況を思い出せ！
殴るのはもう少し情報を手に入れてからでも遅くないではないかっ！！

テーブルの下で僅かに拳を奮わせながら、無表情で感情を押し込める。
そんな私を見て、皇帝はフンッと軽く見下した後、更に視線を鋭くさせた。

「フンッ……、面白みに欠ける娘だな。まぁ、よい。
この後は、お前の異能を調べる。まぁ、余り期待はしていないが、精々頑張るんだな」

「……異能って何ですか？」

「そんなことも知らないのか？
異能というのは、喚ばれた娘に備わる能力のことだ。個々によって様々だが、どの能力も国の発展に大いに貢献してくれた。
お前もそうなるように精進するんだな」

「…分かりました」

え？素直だって？いえいえ、表に出さないだけで、腸が煮え返っていますよ。本当に。

しかし“異能”か…。
自分では今までと変わった感じがしないんだけど、本当にそんなものが使えるようになったのかな？
異世界に渡り、力を得る……マジでテンプレ展開。まぁ嬉しいんだけどね。とりあえず生活の役に立つ能力だといいな。何故って？……早くこんな場所から逃げ出す為にですよ……！！

「そろそろ行くぞ」

私が食べ終わったのを見計らってか、皇帝が席を立った。何だか偉そうに指図されるのが癪に障るが、まぁいいや。いくら子供に見えようが、私も今年で立派な十六歳、大人だもんねっ！ここは一つ、私が大人になろうじゃないか！！

フハハハ…と心の中で笑いながら、私も席を立ち皇帝の後を追って部屋を出た。
皇帝、侍女、私の微妙なメンバーで長い廊下を歩くこと数分、私達はお城の最奥部近くに構えている扉の内の一つの前に佇んでいる。視界の端に映る、更に奥にある扉――昨日お世話になった“召喚の間”に一度恨めしい視線を向けるが、すぐに戻す。
今はこっちに意識を向けよう。
よしっ！と力んでいると、目の前の皇帝が何故か憐れみを含んだ視線をこちらに向けていた。

「…気持ちは分からんでもないが、今更何をしても結果は変わらんと思うぞ。余計なことは考えずに、さっさと終わらせてくるんだな」

なっ……！？
何て失礼なやつだ！そしてやめろおぉぉ！そんな残念な子を見るような目を向けるんじゃないっ！！

「此処からはお前一人しか行けない。だからよく聞いておけよ。入って真っ直ぐ行くと、少し開けた場所に出る。その場所の中央に淡く光る鉱物が置かれている。それに触れると、自然と自分の異能が分かるらしい。
俺もこの中には入ったことはないが、まぁお前でも何とかなるだろう。早く終わらせろよ。俺を待たせるな」

「…用事があるなら、お帰りになってもよろしいですが。後のことは侍女の方々にお聞きしますから」

「そうしたいことは山々なんだがな、如何せん、これも掟で決められたことでな。正妃の能力を真っ先に認知しておらねばならないのだ。
だからお前はさっさと行ってこい。俺はこんなことで時間を取らせたくないんでな」

「…分かりました」

ご説明アリガトウゴザイマス。
私は掟とかどうでもいいんだけどね。寧ろどうぞお帰り下さいませ、だよ。てか寧ろ帰れっ！私の前から今すぐに消え去れーーっ！！
…っていう心の声は一先ず置いといて、今はこっちに集中しよう。
ゴクリと息を呑んで、皇帝達に背を向けて私は扉の先に一歩足を踏み入れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1142v/

Love＊escape

2011年10月28日13時57分発行